

幼時の追憶

その三、大洲にて

幻の園

大洲のお祖母さんの隠居部屋は土蔵であつた。こゝは幼い私にまつても心強いお城であつた。養母に叱られたりするこゝ、すぐ逃げ込み、また訴へるこゝがあるこゝ、飛んで行つた。南に高い窓が一つあるきりで、今考へてみるこゝ可成り薄暗かつたに違ひないが、お祖母さんは老眼鏡をかけ、冬なご真綿の袖無しを着て、よく針仕事をしてゐられた。もちろんおこたもあつた。私はおこたに近づくやうなこゝがあるこゝ、きまつて、「子供は風の兒、風の兒」と言つて追拂はれた。新しい父も母も優しい人であつたが、お祖母さんはもつこ優しかつた。母はごちらかご云ふご少しギスィ人のやうであつた。私は生母に甘えた記憶がない。この母に對しても同じで、幼い私はいつもお祖母さんに抱かれて寢てゐた。前に述べた宇和島のお祖母さんは氣位の高い人で、子供の近寄りにくい老人であつたが、この大洲のお祖

曾根保

母さんは、お伽噺に出て来る、優しい善いお婆さんであつた。白髪頭の上品な、代表的な老人であつた。それに父が大變孝行な人で、この祖母さんに對して、物靜かに、禮儀正しく話をしてゐられるのを見て、幼い私も自然にお祖母さんを偉いお方だご敬つてゐた。今想ひ出しても、私はこのやうないゝお祖母さんを持つてゐたこゝを嬉しく思ひ、また同時に、その有難さが言ひ盡せないのを眞に残念に思ふ。

お祖母さんは病氣を知らない人で、天氣のよい日には大抵龜山の向ふの山へ仕事に行かれた。廣い畑の斜面の中段に山小屋があつて、正午には自在の眞黒に煤けた藥罐に湯が沸いてゐた。「兵三や、もう櫛を探らななるまい」なご言はれるこゝ、次の日曜には頬かむりをした父の姿が高い木の上に見られた、平生その木に近づくこゝ「まける」から近寄るなご戒められてゐたが、その恐るべき木の上で平氣で仕

事をしてゐられる父を仰ぎ見て、全く不思議な感じに打たれた。漆に「まけた」人を見たこゝがあるから、その感じは一層深かつた。櫛の實、あのからからになつた感じの、しかも重い、つるつるする黄色い櫛の實、父の籠にはいりそこねた一房、二房を、その木の下で拾つてあげたが、父も



母（向つて左）

子が、晴れた青空の下で、何の心配もなく、睦ましい日を過すことの出来たあの遠い昔は、今の私にこつてこよない貴い思ひ出である。シェリは『雲雀』の歌の中で、

そのかみ偲び、末思ひ、

あらぬを傷み焦るゝよ。
いこ真なる微笑にも
憂き煩ひはひそめるよ、
いみじき歌も悲みの

思ひを語るそれなれや。

さ歌つてゐるが、それは普通一般の浮世のならはし、優しい父や祖母に守られて過したその頃の幼い私は、幻の花園に生ひ立つ若草のやうで、やがては「この生、荆棘の中に落ち、朱の血に染む」我身ではあつたが、たゞへ暫しにせよ、暖い光に満ち充ちた世界が私にもあつたのである。

東京の郊外で、背の高い桑の木が二三本の藁に程よく枝を縛られて突立つてゐるのを見るさ、背の高い父が、腰の荒縄に少し濡した藁を挟んで、廣い桑畑の中を次々に、しやちこばつた枝を縛つてゆかれる姿を眼の前に浮べるこゝが出来た。一日の仕事を終へて、鍬や鎌を山小屋に片付け、焚木や大きな荷物父が擔ぎ、眞黒な藥罐を祖母が提げ、私にも何か持たせて貰つて家に歸つて来る。何處かで讀んだ佐藤春夫の詩を想ひ出す――

武藏野の

片ほざりなる片丘に

湧き出づる泉もありて

杏の樹あまた植ゑつけ

父ミ子ミ睦みて住まむ

幻の杏花村舎の

樂しくもあるか。

生薑漬を盗む

土藏の二階は恐しくて一人では上つて行けなかつた。鼠

が澤山ゐて、古い大きな米櫃には

時々青大將がミぐるを巻いてゐた

さうである。一度、裏の人が長い

青竹の先に縄で輪をこしらへ、そ

れに青大將を巻きつかせて川に流

したことがあつた。黒山のやうな

人だかりが橋の上から青大將を見

送つた。竿の先に捕へられた大き

な蛇が、きらきらする水の上で輾轉して、次第く／＼に小さ

なつて行つた。

階段の下が戸棚になつてゐたが、こゝに大きなガラス瓶

があつて、生薑漬が一杯詰めてあつた。お祖母さんのお手

製であらう。私は二三枚取出して食べてみた。だだつ廣い

土藏の中で、甘い物を發見した喜びを、それを許可なくし

て失敬する恐怖がこんがらがつて、幼い私は言ひやうも



土藏の木ノ抽

ない興奮を身に覺えた。おいしくて食べるのではなかつた。いくら砂糖漬でも、まだ生薑の味に興味を覺える年頃ではなかつた。たゞ何となく、留守居のさびしさといつたやうな氣持から、一枚二枚ミ失敬してゐた。盗んで食べてゐるさういふ罪を感じてではないが、お祖母さんが、それに氣がつき、何かお小言でも言はれはしないかミ内心びくびくしてゐた。お祖母さんが戸棚の前に行かれるミ、私は眼

をそむけるか、土藏の外に飛出して、知らぬ顔の半兵衛をきめ込んでゐた。一向に氣が付かないので、却つて心配し出した。そのうち私の目にも生薑漬の減るのが目立つて來た。何ともしもたゞでは濟まないやうに思はれ出した。それにも拘らず、毎日生薑漬は減つて行く。しまひに、さうたう瓶の底まで行つてしまつた。その間に、お祖母さんは唯の一度も生薑漬のこきは仰有らなかつた。もし口に出されたにしても恐らく、「大方頭の黒い鼠がひいて行つたのだらう」ミにこゝしてゐられたであらう。「頭の黒い鼠」ミいふ言葉はこの祖母さんから聞き覺えた言葉であると同時に、これが「盗み食ひ」をする味を覺えた最初であるやうな氣もする。さても悲しいこゝではある。

お祖母さんはオハグロをつけてゐられた。錆びた鐵の鉢には見るからにきたらしい液體がはいつてゐたやうである。曇つた鏡を又木になつた鏡掛に載せて、丹念に齒を染めてゐられた。また時々絲を紡いでゐられた。片手で車を廻しながら、ブーイ、ブーイと手つき良く竹の管に絲を巻いてゆかれるところ、また絲の先を一寸なめて管に投げつけられる手際なご、私は感心して見入つたものだつた。もうあのやうな昔の様は見られなくなつて了ふのであらう。これから後の世のお婆さんの仕事といふのはこんなことになるのかしら。田舎では、まだ昔のまゝの日常生活が残つてゐるはいゝが、そんな風に變つたのか今の私には想像もつかない。

おやいと

私は今之を書きながら、右の食指の第二節にある灸の跡を見てゐる。これが何時の頃の記念のものか、想ひ出さうとして、なかなか想ひ出せない。大洲に来る前、村の舊校舎の前、貧しい人の子供に石をぶつけて逃げて歸つたことがある。舊校舎は製茶場であつた。私は今春、牧野原の茶園を見學した時、あの茶の強い香の中で、屈強な人々が茶をもんでゐるのを見て、今迄つひぞ想ひ出したこともなかつた幼時の或る日をも想ひ出した。即ち舊校舎で村の若い男女が威勢よく働いてゐる光景がまざまざと蘇つて來

た。と同時に、舊校舎の角の家の子供に石を投げつけて、母親に怒鳴り込まれた夕べの恐しさをも想ひ出した。しかし、この時母は、いとも恐縮して謝罪してゐられたが、お灸はすえられなかつた。するさ、やはり、大洲の母から頂戴した貴重な形見であらうと思はれる。あゝこの人差指のやいさ！大聲で泣きわめく男の子を押へつけて、お祖母さんが引止めるのもかまはず、殘酷なことを敢てせられた第二の母！あの優しかつた母も今は此の世には在さず、やいさの跡を見てゐるこそゞろに淋しさがこみ上げて來る。

(つゞく)

世界中で唯一人

美しい空の何百さいふ星

濱邊に集まる何百さいふ貝

歌つて過ぎる何百さいふ鳥

晴れた日に飛ぶ何百さいふ蜂はち蜜

夜明けを迎へる何百さいふ露

紫のクローバの中の何百さいふ仔羊

芝生の上の何百さいふ蝶

けれども世界中でかあさんは唯一人

——デヨーデ・クローバ——